

八雲村誌（抜粋）

第四節 駒返峠今昔物語

一、伝説の駒返峠

駒返あるいは駒帰といわれる峠は他にもある。比較的近いところでは鳥取・岡山県境、現国道三七三号の志戸坂峠がそれである。今はトンネルが開通しているが、鳥取県側の智頭町大字駒帰という集落は現存している。

昔武内宿禰が因幡に下向するため当地に至ったが、馬が峠を越えられず引き返し、八東越から入国したという故事が地名の由来だと伝える。また土地の豪族山内氏と佐治氏が争い、山内氏は亡んだが、この時山内氏が持っていた名馬を佐治側では手に入れようと追いかけるが、馬は追われるたびにこの峠へ逃げ、追っ手が去るとまたもとの山内氏の故地へ帰っていくということを何度も繰り返したので、「駒還」と称するようになったともいわれている。（「角川日本地名大辞典 鳥取県」

・平凡社「鳥取県の地名」）

これは馬つまり駒にまつわる伝説だが、当村の駒返はいささか趣が違ふ。「ふるさと百話」（八雲村公民館・八雲村文化財保護協会編昭和四十六年刊）にのせる「小麻加恵利坂」には次のように述べられている。

小麻加恵利坂

小麻加恵利坂は駒返坂といって別所の奥から広瀬に通ずる旧道にある。

イザナミノミコトが、その八雷神に千五百の黄泉軍をそえて、イザナギノミコトを追わせた。イザナギノミコトは十拳の剣を抜いて後手にふりながら逃げたが、イザナミノミコトはなおしつこく追って、黄泉津比良坂の坂本によせてきた。

イザナギノミコトは、その時、そこにあった桃の実三箇をとって投げつけたので、黄泉軍は、ことごとく逃げかえった。

イザナギノミコトが剣を抜いてかざした処を剣山といい、今の日吉の神社のある山である。また黄泉軍に桃の実をなげうって防いだ時、悪魔である黄泉軍は恐れて逃げ去ったので、その地を去魔返りと呼び、ここは今の駒返坂である。

桃の実は、その後、駒返坂の坂本にある藤原の地に繁殖し続けた。明治中頃までは、桃の木が生い繁り、春ともなれば桃花らんまん、近郷からは、これを観賞しようと多くの人々が杖をひいたものである。

桃果はまた、藤原桃として近村に売れて行き、多額の収益を得たと、いわれている。

（原文・八東郡誌）

（同書四・五頁）

これとほとんど同じような伝説を、江戸時代の地誌「雲陽誌」は次のように載せている。

小麻加恵利坂

古老傳に日此所は伊佐奈枳尊を雷等追来とき、道の邊に大なる桃の樹あり、伊弉諾尊その樹の下にかくれ給ひて桃の実をとりて雷に擲たまへは、雷共皆退走ぬ、此桃を用いて鬼を避

の縁なり、故に小魔返といふ、此邊に大なる蛇あり五月かならず出ぬ、俚民是を梅雨左衛門といふ、敢て人をおそれず人も傷つけず、古より爰にあり。

(雄山閣版一一四頁)

『雲陽誌』の成立は享保二年(一七一七)であるから、この伝説は古くから伝えられてきたものであることがわかるのである。

これで地名伝承の古い姿は、小悪魔つまり「小魔」を追い返したということに由来すると伝えられ、それが後に駒を返したということに、音が通ずることから転化したものであろう。たしかに、さほど高い峠ではないものの、馬で越えようとすれば難所であったことは想像される。

二、回想の駒返峠

この峠について、それぞれの想いを書き遺した人たちがいる。森山氏以外は故人であるが、その人たちの想いを込めた文章を紹介してみよう。

石倉諒一「道直しの碑」

さき程の道しるべ(註 星上松江道しるべ)によって左松江道を少し上がると峠に達する。所謂駒返り峠である。さきの札打道(註 星上寺から広瀬の岩倉寺への札打道)とはちがって人通りが稀なのか草が立っている。上がると右(東側)に才の神、左にこの立石がある。

ぎこちない山石で幅五〇センチ、厚み四〇センチ、高さ六五センチである。その正面中央に「両平之道直シ」と刻み、その右に「明治五壬申五月」、左に「施主秦氏世話人藤原口口」と彫っている。御維新により広瀬藩がなくなったので、県都松江への往来も多くなったであろう。広瀬と松江をつなぐ道は、これが一番近く、両側の村が合力で道の整備を行った。その時の記念碑がこれである。施主の秦氏は広瀬町きっての旧家であることは周知のことである。『村の石ぶみ』一三頁下 昭和五十四年十一月一日)

石倉氏は本村きっての歴史通であり、また民俗通でもあった。本村誌の編集執筆者であったが、平成八年、発刊をみることなく逝去された。

安部鶴造「山村記一一明治・大正の八東郡奥岩坂のくらし」

この山村一一八東郡東岩坂と、能義郡広瀬町祖父谷とが接する点に、大八車(荷車)という二輪車を通す「道路」と称する幅員一間半の道が拓かれたのが、日清戦争後のことである。正確な記録は村誌等に譲って、記憶によると、両郡境を貫く最大の難工事「そうめん谷」の切割について、いろんな噂を聞いた幼時の仄かな思い出があるところから、完成は、凡そ、明治三十二、三年頃ではなかったろうか。この街道は、松江、広瀬を結ぶ古い街道である。広瀬町には能義郡役所があり、かなり枢要な路線で、これに車力を通して開発しようというのが目標であったのである。ところで、この街道に

は、戦国時代から有名な駒返り峠があり、この所へ車力を通す切割りをやることは、困難とみて、新道は、これを避けて約一キロも西、前記そうめん谷の鞍部を通した次第である。

その頃（恐らく郵便が始まって以来だろうが）郵便さんというものが、松江から広瀬へ、日に一回通っていた。勿論、駒返りの難路を越してである。この郵便さんは、黒の張被に脚牌、赤で干印のついた黒のまんじゅう笠、わらじばき天祥棒に荷（郵便物）をつけて走るのだが、その走り方が、ひょいひょいと一種の飛び方である。それが、丁度午頃に通過するので、時計というもののまだ稀だった此頃、さア郵便さんがさっき通ったから、そろそろ午めにしようといった具合であった。

さて、その郵便さんが、はたと通らなくなってしまった。噂では、荒島、広瀬線が完備したので、ここは止めになったげなという。ひどく寂しい気持ちにしたものである。これは、駒返り線という戦国時代以来の重要路の吊鐘であった訳である。頃は、日露戦役後でもあろうか。処で、この吊鐘は、切角出来た新道の価値にも鳴り移った観があった。車は、こんな山の中へは入らず、「里」（荒島経由道）が専ら利用され、そうめん谷の切割は、土砂崩れがあっても、見送られるといったことになり、早くも廃道寸前の状態になってしまうという有様で、この道路は、ほとんど岩坂面の開発にだけ用立ったことになったのである。「而して、その恩恵を受けたのは、東岩坂の奥部で、大体六〇戸位、それに、能義郡山佐村内で、村界に近い、山村の一部である。

第2—44図について説明すると、意宇川の支流東岩坂川を、星上山の西の峠を遡ると、落合（現行の五万分の一地図には髭とあるが、この地図は誤っている）で一三、四戸が峠を囲んで点在するが、ここで川も道も左右に分かれる。左が、駒返り峠道で、広瀬地域の面ノ子へ抜ける旧の本街道、右すると深原（同じく五万で西奥とあるのも誤り）の五、六戸で、旧道は、山佐地域の三本桁へ越せたもので才ノ神もあったが、恐らく今は山林になっているだろう。前に記した新しい「道路」は、落合から川に別れ、西側の山腹を斜めに走って、深原奥で、例のそうめん谷の切割を越えて、能義郡地域になる。

「山村記」の範囲は、右の落合から、東谷にそう藤原。西で髭、持山、大杉、鳥屋郷の小字の尾根続き、及び能義郡域内になる尾根続きの三本桁、畑等の地域を含む、標高二〇〇～三〇〇メートルの台地型の地勢であり、戸数は、約五、六〇戸である。

註1 大八車は荷台が十二平方尺くらい。米なら三俵、木炭（五貫俵）なら十俵くらい積めた。二人では、もっと積める。大八とは創業者の名だと聞いた。惜しいことに何処の人かを逸した。

註2 駒返峠は有名な名だが、聞く処では、現今、道もないそう。先年責倉の上が山

崩れして通行不可能になっているとか。処でこの駒返峠にも新旧二通りあったそうで、私の知っているのは、その新の方である。出来た年代は分からないが、責倉で旧道に分かれ、旧道の峠よりも、やや東方の鞍部を越していた。上は草っ原で、オノ神はなかった。立石があったという人もあるが記憶にはない。少し下の東に、番所らしい成があり、庭木として手入れしたらしい楓があったことを覚えている。

この峠へは北の方星上山から、出雲札道が来て、次の広瀬岩倉寺への順路をなして居り、三叉路であった訳である。面ノ子坂は、とても急峻である。思うに、旧道はこんな坂はなかったが、道はかなり迂回して祖父谷へ出たのではあるまいか。

註3 世の変わり方は、面白いもので、このように荒廃のまま、遺棄されていたそうめん谷切割が、近時（戦后）改修されて新「車力」たる自動車が通っているという。そして、立札が立ち駒返峠と表示してあるとか。まことに(?)感概なきを得ない。所は変わっても旧名でよぶ例は四十曲峠等にも見られるところである。

「研究ノート」として『山陰史談』四号、〈昭和四十七年（一九七二）一月一日発行〉に発表されたもので、のちに『郷土誌出雲』（山陰文化シリーズ43 昭和四十八年刊）に収められたが、註の入れ方等少し違うので、この最初の稿を採用した。典型的な回想記で、よくみると地名の振り仮名がわざわざ現地よみに振ってあって、それだけ思い入れの深さを感じる。

なお安部氏は明治二十八年（一八九五）東岩坂の生まれで、長く銀行業務にたずさわり、のちには山陰合同銀行の監査役を務めた。なかなかの文筆家で、「不昧公と茶の湯」（山陰文化シリーズ36）等の著作がある。

雲田敦美「駒返峠」

一体誰がどのようにしてそこを選び、集落と集落とを結び、その道がやがて文化の通り路となり、交通機関の発達と共に人々に忘れられ、やがて普通の山の森林に帰っていったか。この峠路に私は深い郷愁のようなものを感じる。

今は辛じて通ることが出来るがもうあと短い歳月で完全にもとの森林になって昔の人達の哀歎をこめた通り路のあしあとの失われてゆく峠路は、見廻して見ると私達の周囲に沢山ある。松江の近くの駒返峠もその一つである。秋も近い夏の日、二十数年ぶりでこの峠を訪れて見た。駒返峠は松江市から八雲村岩坂別所を通過して広瀬町に越すふるい峠道である。この峠を越えて広瀬町に出る距離は一番直近の道であるし、旧藩時代、松江藩の分家であった広瀬藩とのいろいろな意味での松江藩との交流は多く、従ってその頃からこの峠はおそらくよく利用されていたものであろう。

その頃から利用されていたと想像出来る道は、松江から荒島を通る道、揖屋あるいは意東から京羅木山の稜線を越える金比羅越し、岩坂別所から星上山を通る札打道等があるが、それらの中で矢張り本当の峠路らしいのは、駒返峠のように私には思える。

駒返峠という名称が文献ではじめて見えるのは私の知る範囲では「出雲私史」である。尼子経久の子興久が、父から与えられている領地が少ないことを不満として、父経久と戦い連戦連敗した時、ひそかに湖を渡って山を越え

別所より駒返峠を越え富田に入り一挙に本拠をついたら勝つことが出来ようと興久に進言するものがいた。しかし、その戦略は用いられなかったということがでており、この文中に駒返りという名称が記されてある。

この駒返峠の名称は以前は、去魔返りと言われ、その由来は今の松江市と八雲村の境界近くにあるイザナミの尊の御陵と伝えられる神納山の比婆山伝説に結びつくものである。夜見の国に神去った女神イザナミの尊をしたって、夫神であるイザナギの尊が夜見の国を訪れ、腐った自分の醜い姿を見てはならぬという女神との約束を破ったためイザナミの尊は怒り八重神に千五百の黄泉軍をそえてイザナギの尊を追わせた時、櫛を投げ、桃の実を投げながらその追求から逃れたという話が古事記に出ているが、八雷神が尊の投げた桃の実を食している間に尊は逃れ去ることができ、その八雷神の軍兵が引きかえした所がこの去魔返りであるというような説明が古い本に出ている。しかし、なにかこの説明にはことさらに神納山の御陵伝説の信憑性をつけようとするようなこじつけが私には感じられる。がそのことはともかくとして、この桃に関係あるかどうかは知らぬが、この別所はかつて明治の初年ごろ桃の栽培地で、桃の花の咲く頃多くの人が桃の花を見物にここに出掛けたそうである。しかし現在は桃の木等見ることは出来ない。

この駒返峠にゆくには八雲村別所でバスを下車して、村の中を通る一本道を登ってゆくのであるが、中途藤原部落に入ってゆく分岐点から藤原部落の方に入ってゆくのである。

この一本道の本道は、私の少年時代「新道」と呼ばれ岩坂から広瀬町に通じる馬車の通れる道として改修されたものであり三本柘部落の上を通って広瀬町祖父谷に通じている。

また、藤原部落は古く備前長船の生まれで道永という刀鍛冶が住んでおり名工として知られていたが、その鍛造についていろいろな伝説がこの地に伝えられている。

最近この藤原部落を通る林道がつくられ、かつて通った駒返峠にゆく道がはっきりと判らぬので部落の娘さんに駒返峠に行く道を尋ねたがもう若い人たちには、その駒返峠自体が知られぬようで、その娘さんの家の人らしい年配の人に教えられてやっと峠にゆく道が判り田圃の畦やあるかなしかのような小道を辿った。しかし、どうも私の記憶に残っている道とは違うようであるがともかく教えられた小道を稜線めざして登り、登りつめた所に新しい板切れで駒返峠の記された標柱が立っていた。しかし、私はこの峠にたって見て全く狐に化かされたような思いがしてならない。ということは私の知っている駒返峠とは全然違う駒返峠である。私の知っている駒返峠は、峠の近くは広い真竹藪で、道の傍らには三、四基の墓石があり古い屋敷跡の石垣が残っており、ここを登りきった峠の左手には賽の神か山の神かを祀った大きい木があった筈だがそのようなものは一つもなく峠の右手にやはり山の神か

なにかを祀った杉の木があり、真新しい御幣がたてられている。

どうも納得出来ぬまま引きかえすことにして峠のついで下にある一軒の家を訪ねてもう一度よく尋ねたところ、昔の駒返峠はいつかの大雨で道の中途が山崩れで通れなくなったということであり段々に聞いているうちに稜線に登る谷筋が全然違っていることに気がついた。通れないなら仕方がないと思って帰路についたが、まだ日は高いしこのまま帰るのはなにか心残りなので通れないなら行けるところまででも行こうと思いなおし、谷を登る小道を辿った。誰一人通らぬところ故、道をきくという訳にもゆかず、ただ、私の足の裏に感じる踏みあとの確かさだけが頼りであった。

山に登る人はよく踏みあとをたどるということを用いる。ほとんどあるかなしかの小径でも、それが以前多くの人の歩いた道であれば足の裏に微妙に感じられる長い歳月をかけて踏みかためられた堅さがあるものである。それがいって見れば一種の人間の暖かさに通じ、また歳月のつくった雰囲気とでもいえるのかも知れぬ。わけて峠道は様々な人達のおりなしたであろう哀歓のこめられた道である。やがて、うっそうと茂った樹林の中の小道は、私の心に見覚えのある風景を展開してくる。やはりこの道が駒返峠への道であったようだ。峠には明治五年に建てられた自然石の道しるべがある。

これが本当の駒返峠である。昔の友人に逢ったような心のやすらぎが感じられてくる。この駒返峠が名もない稜線を越える小道にすりかえられようとしていることに妙な腹立しさが感じられる。

この駒返峠の中途に「セメクラ」という地名がある。多分馬でこの峠をこれから越える人は、このあたりで馬の鞍を締めなおしたろうし、また、峠を越えて来た人も、峠道の終わりに近いこのあたりで鞍のひもを締めなおしたことになる。惧らくは、この地名は「シメクラ」であったろうが段々それが訛ってきて現在の「セメクラ」になったと想像出来るが、これらとは違って意識的に峠がすりかえられようとしていることは許せぬことのように思える。

峠からもとの道を引き返して帰路につく。中途夕立に見まわれる。

木々の葉を鳴らしてはい然と降る雨を木立に避けながら、妙に腹立たしさが湧いてくるのを感じずにはいられなかった。（昭和四十七年十二月 松江山の会機関誌「峰峠溪」）

本文は「出雲山岳誌」（山陰文化シリーズ。昭和四十九年三月刊）所収の文によった。雲田氏は大正五年（一九一六）広瀬町の生まれ。敗戦により復員後、松江市役所に勤務するかたわら登山にしたしみ、出雲山岳界の大先達という存在であった。昭和三十五年全日本山岳連盟公認指導員となり、のちには環境庁自然公園指導員となった。昭和四十八年松江市役所を退職されたが、故人となられた。

出雲の山について綴られた、多くの山行記録やエッセイは貴重なものであ

る。この文章をみると、昭和二十年代と四十年代では、峠の道筋が変わってしまっただことが知られる。

森山俊雄「峠の石碑（駒返峠・星上山の辺り）」

「昔の人は山坂をいとわず二地点を結ぶ最短距離を見通したかのように、自然の地形に従って径をつけて往来した。

駒返峠は一昔前までの松江と広瀬を結ぶ往還広瀬寄りの峠で、八束郡八雲村東岩坂から能義郡広瀬町祖父谷へ越える山径である。

今でこそ松江から広瀬へ行くには大橋川から中海沿いを東上し、荒島から飯梨川の西岸をさかのぼる迂回路線を通るが、これは大正後期から発達した平地利用交通機関の賜である。今時、「広瀬へ行くには八雲村岩坂に入る方が一番近道だよ。」などと言ったら大抵の人は不思議がる。

各地の古い山越えの峠は交通機関の発達とともに忘却されてしまった。ありし日の駒返峠は、すっかり任務を終えて樹間に眠っている。今は通る人もないこの峠は、もう昔の峠と言った方がよいだらう。忘れられた峠道は何かわびしい。そして、そのわびしさが楽しいと言ったら変だらうか。春も、夏も、秋も、あえて冬の白い雪の季節にも、わびしい音無しの峠道には楽しさが一杯ある。

八雲村東別所と広瀬町祖父谷との境に連なる標高四〇〇メートル程の丘陵北側（別所側）斜面一帯が「コマ返し」と呼ばれ「去魔」の字が当てられる。古事記の伝説によるもので、黄泉に逝った伊邪那美命に、約束を破って今一度会いに出かけた伊邪那岐命が、伊邪那美の尻に蛆虫の這う光景に驚いて逃げ出すと怒った伊邪那美が追いかける。遂に別所辺りまで逃げた伊邪那岐は桃の実をとって投げながらこの坂を越え伊邪那美の追跡からのがれることが出来た。これが由縁であると言う。

併し、江戸時代以前より駒返峠の字が当てられており、語呂が偶然の一致をみたケースであろうか。峠に関しては駒も引き返す程の急峻として駒返しと呼称が始まったと考えるのが妥当だと何かで読んだことがある。が、この全く「去魔」ぬきの説にも少々不満である。

それはさておき、東岩坂の入口から落合の橋を過ぎて登ること二十分余り、責倉部落に着く。人伝えて「馬の鞍をしめなおして峠に向かった」として「しめくら」の呼称がおこり、訛って「せめくら」になったと言う。

部落から先、余程急坂の峠だらうと思ったが意外なことに道は直登をさけて東へ緩やかに山腹を縫って登っている。駒が進みかねる程の難所は見当たらない。馬と話しながら自然を楽しめる山路であっても「しめくら」するような急峻はない。

斜面一帯を総称する「去魔返し」の山稜を越える峠の意義に解すれば納得出来ぬこともないが.....

ある日、地元の井谷さんの話を聞いた。井谷さんの話では今の駒返峠の他

に昔の駒返し峠があり、それは責倉より支尾根を直登して稜線の鞍部を越えたいらしい。責倉部落の上域に一かかえもある大樁があり、ここから今の峠は緩やかに山腹を巻くが、その昔はこの樁尾根からほとんど直登したという話である。成程、昔々は山坂をいとわず最短距離を地形に従って径をつけた。時代を経て土木工法が発達するにつれ急峻をさけて緩い巻道の峠に変貌していったのだ。

急峻な昔の駒返し峠は、奇しくも私が最初に訪ねた時踏み込んで苦労した山径であった。大樁の近くに祠があり、恐らく峠下の神であろうと思い眺めると仙道が尾根を登っている。登る程に急坂となり、やがて上部で踏跡が消えたため、稜線の鞍部を目指して敷の中を這った。

鞍部には径があつたらしく崩れた幅員が残り、根元だけの大きな朽木の前に積まれた平板状自然石は峠神を祀った痕跡に思えた。そして一時の後、鞍部をぬけて広瀬側孟宗竹林の中を祖父谷まで下り、再び同じルートを進んで責倉部落に引き返している。

帰宅して出雲山岳誌（雲田敦美著昭和四十九年刊）の記述中駒返し峠を読むと腑に落ちないことばかりである。峠には明治五年に建てられた石碑があり、附近は真竹の林で家敷跡も残ると記されている。

一週間後、緩やかな今の峠を歩き真竹、家敷の石垣、石碑に出会い駒返し峠を確認した満足感にひたった。そして以前敷を這った峠と覚しきは私の錯誤に思ってしまった。

「峠の名にしては随分ゆるやかですナ……………」

と井谷さんに話したことから昔は別のルートを急坂で越えた話になったのである。

昔の峠なら鼻歌ではとても登れない。急坂には人間程強くない馬は大息について立止るだろう。人間は二本の足で立つから重心の支点面積が小さくて安定するが、四脚の馬は体重が後足二本にかかりすぎバランスが保てず大変である。これなら駒返しである。

四月中旬、山々の下草は未だ去秋の枯葉の下に新葉の緑をのぞかせる程度で藪歩きに支障はない。そんな或る日駒返し丘陵の山稜を縦走することになった。山先輩の岡村さんの誘いがあり喜んで従った。稜線を歩けば数々の鞍部を越えた径がわかるし、峠跡に石積みが残ったり祭祀した土器の一片もあるかもしれないとひそかに期待した。

丘陵の東側からまず一軒家に下る峠、次に今の駒返し峠、昔の駒返し峠、さらに二本の仙道峠そして稜線を切通した二車線の自動車道、さらに西に向かって深原から三木柵、深原から畑への峠径がある。

最後に記した二つは去魔返斜面を外れるが自動車道を除いていずれも峠の神が祀ってある。小さな石積みがあつたり、割竹に和紙の祈禱札をはさんだ幣串が立てられていた。山仕事以外に人影を知らない仙道の峠だ。

この冬、日頃懇意に願っている御夫妻とも山好きな方々数人と昔の駒返峠頂上から山稜を縦走して今の駒返峠に出た。雪の斜面は深くはまり、吐く息が凍る。峠の広瀬側下りの分岐に「左松江・右星上寺」と刻まれた石道標がまず目につく。薄暗い杉木立ちから松江に下る辺り竹林の上雪に陽が射して明るい空間が広がっている。光のコントラストが峠をすばらしい幻想に仕立てている。（下略）

森山俊雄氏は昭和四年木次町の生まれ。大阪薬科大学卒業後、薬剤師として、現在松江市南田町でタマチ薬局を経営している。松江山の会会員で、今も現役の山岳人である。

本文は「真山の辺り他わが山径行脚』（平成元年刊 私家版）から引用した。転載にあたっては快く承諾された。雲田氏といい森山氏といい、登山家たちがこの峠に寄せる深い想いを、あらためて知ることができるし、また同時に、この峠が時代の経過とともに、どのように変遷してきたかを物語る証言でもあろう。

三、地図にみる駒返峠

わが国で精密な地図が作成されはじめたのは江戸時代である。

江戸幕府撰の正保国絵図〈正保元年（一六四四）着手〉・元禄国絵図〈元禄十年（一六九七）着手〉・天保国絵図〈天保六年（一八三五）着手〉はその代表的なものであるが、この三つの出雲国絵図をみるといずれも「東岩坂村ノ内別所」から、郡界を越えて「祖父谷村」まで朱色の道筋が記されている。ここに確たる道が通っていることを、松江藩が幕府に届けたことは明白である。ただいずれにも「駒返峠」の名はなく、ただ一筋の道が描かれているだけである。（第2-46図） また伊能忠敬の測図（中図）にも道筋はあるが峠名はない。

駒返の名が出てくるのは文政四年（一八二一）神田助右 工門、同新二の作成した「出雲国十郡絵図（小絵図）」（島根県立図書館蔵）で、その部分を拡大したものが第2-47図である。

国絵図では一本の道筋しか記されていないが、これでは星上寺を経て、上意東村との村界を辿り祖父谷村へ至る、いわゆる札打道、そして駒返峠、さらに西寄り西岩坂村境の近くを、下山佐へ越す道が記されており、それだけ精密さがうかがえる。

いま一つは原家（飯石郡鍋山）旧蔵の「御国絵図」（第2-48図）である。この絵図は、どのような経緯で、いつ時点に作成されたか明確ではないが、付属の史料に「文久三亥獵月求之」とあるので、幕末の文久三年（一八六三）以前のものであることは疑いない。札打道と駒返越えの二本の道筋が記されている。

ここまでは、どちらかといえば東岩坂側からみた図であるが、逆に広瀬祖

父谷側からみたのが、文化元年（一八〇四）「広瀬藩御絵図」（安来市赤江町金藤家蔵 現在安来市立民俗資料館蔵）で、該当部分の拡大図が第2-49図である。

この絵図ではいくつかの興味深い点が見られる。まず「駒返峠」と記された個所に突起状のものが描かれているが、これはおそらく藩界を示す標柱が建っていたことを示すものであろう。峠から面ノ子側へ少し下がったところに「地蔵」とある。堂舎の印があるが、とても現存していないだろうが、もし何らかの痕跡でも現認できれば、江戸時代の峠越の道筋の見当がつく。さらにそれを下ったところに、図版では見えにくいかもしれないが「御番所」と記されている。東岩坂側ではこのような跡を知る手がかりは見当たらない。

以上が江戸時代の地図（絵図）類に見られる駒返峠である。石倉氏や森山氏の回想に出てくる「道直し碑」によると、明治五年（一八七二）にこの江戸時代の峠道は改修されている。

明治期に入ってから古い地図は、「地引絵図面 二番 第十一区出雲国意宇郡東岩坂村」（八雲村役場文書）である。明確な年代は記されていないが、裏表紙にあたる部分に「地租改正耕地図面」と後代の註記があって、地租改正の後、ほどなく成立したもので、およそ明治十年代半ばぐらいの地図と推定される。この図の駒返（帰）峠の部分の拡大図が第2-50図である。

印刷の都合で表現できないが、この図は着色されており、図の中の「駒帰二千二百三十」は黄色で、おそらく田であったと考えられ、「二千二百二十六」と「二千二百二十八」は茶色で畑と考えられ、「二千二百二十六続」と「二千二百二十七」は白色で屋敷か数ではなかったか、と考えられる。注目されるのは「駒帰墓二千二百二十九」である。これは雲田敦美氏の回想に、「峠の近くは広い真竹藪で、道の傍らには三、四基の墓石があり古い屋敷跡の石垣が残っており」（二五二頁上）という記述と全く符合する。この高い所に人が住んでいたわけで、それは峠と何らかのかかわりを持った人であったかも知れない。

東岩坂村の地図は明治二十二年に作成されたものが、もう一枚あるが、これでは駒返峠付近は詳しくない。

次に国の公的機関で作成された刊行地図類には、駒返峠はどのように記されているのか、それを見ることにしたい。

第2-51図の「輯製二十万分の一図」は、当時の参謀本部陸軍部測量局（のちの陸地測量部）によって編輯、製作されたもので、明治初期における代表的な地図の一つとされている。拡大図にあげた部分は、明治二十一年に輯製製版された。全国的な公的地図に「駒返峠」が載った最初のものである。なおこれには「駒帰」と表記されている。

第2-52図は陸地測量部が作成した、いわゆる五万分の一図の拡大図で、五万

分の一図では最初のもので、峠の標高が 三六七メートルであったことが初めて知られる地図でもある。ただこの図で気になることは、東岩坂側で峠に至る道が、ほぼ東西方向に走って峠に達する点で、これは森山俊雄氏の作図（二五三頁参照）と比較すると「昔の駒返峠」の道ではない。安部鶴造氏の（註2）にいう、「処でこの駒返峠にも新旧二通りあったそうで、私の知っているのは、その新の方である。」（二四九頁下） というのが、この地図にある峠であろう。

なお「そうめん谷」の切割を通る車力道がこの地図ではすでに開通しているが、この道路でも郡界地点を越える個所を駒返峠と呼んだようだが、これはつまり第三の駒返峠である。

陸地測量部も戦後は国土地理院に変わり、五万分の一図もその間しばしば修正

された。「駒返峠」も、大正四年（一九一五）の「第一回修正測図」から、なぜか「駒返峠」に修正されたが、昭和三十五年（一九六〇）の「資料修正（道路）」図までは峠の所在が記入されていた。

ところが「昭和三十六年測量、昭和三十九年補測調査」図から突然姿を消した。

その部分を比較したのが第2-53図である。

人がほとんど通らなくなり、廃道に等しい道として抹消されたのであろう。これで地図上に記された駒返峠を再び見ることはなく、トンネルの時代へと歴史のページをめくるのである。